
めいぶる しろっぷ

奈胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めいぷる しろつぷ

【Nコード】

N3801E

【作者名】

奈胡

【あらすじ】

幼なじみから始まった恋。偶然の再会から5年がたった今、永遠の別れを突きつけられる。2人は一体どうなってしまふのか……。

プロローグ

『龍ちゃん』 あたしが言う。

『愛してる』 彼が言う。

このやりとりも、これが最後。

『忘れんなよ、俺のこと』 彼がいつものように冗談交じりに言う
と、あたしも微笑んで頷いた。

微笑みが引きつっているのが分かった。握りしめられていた手も、
本当は震えていた。だけど、彼に悲しみを悟られるのだけは絶対に
嫌だった。

だってあたしは、幸せだったんだから。

玄関の厚い扉を開き、外に出た。真夏の湿り気がじんわりと肌を
包む。蝉たちの楽しそうな合唱に、あたしの心は突き刺されたよう
に痛んだ。

『忘れられるわけじゃない……』

苦し紛れに吐いた弱音は、閉まった扉の向こうにはもう届かない。

いつかはこういう日が来ると分かっていた。分かってたはずなのに、
どうしてこんなにも辛いんだろう。

どうしてこんなにも、彼を求めてしまっただろう。

彼はもう、あたしのものじゃなくなったのに。

あれからもう、5年も経つんだね。

ねえ、龍ちゃん？

まだ、愛しています。

01＊あたしと偶然

「はっ、はっ、はっ……」

小刻みに吐かれる白い息。体が芯から凍ってしまいそうな冬の夜の街を、あたしは地下鉄の駅に向かって走っていた。

薄手のロングワンピースにニットカーディガンを一枚、という防寒のカケラもない格好でも、あたしは平気だった。それよりなにより、早くケータイを取りに行かなければならなかった。人を待たせるといのは、やっぱり好きじゃないから。

「その電話、あたしのなんです！」と電話口に向かって、少しあわてて話しかけたのはついさっき。学校から家に帰るとカバンに入れておいたはずのケータイが無くて、さんざん探したあげく電車の中でウトウトしていた自分を思い出した。しかたなく家の電話器から自分のケータイに電話をかけた、というワケだ。

電話に出たのは若そうな男の人だった。澄んだテノールの、優しい声の持ち主だ。自分のアルトを少し不安定だと感じているあたしには、その声がとても魅力的だった。

「助かります！ 拾っていただいて、ありがとうございました」

「……どういたしました」

声は優しくあったけれど、少しぶっきらぼうというか無愛想というか、そういう印象を受けた。

「今すぐ取りに行きますので。どこにいらっしゃいますか？」

『なりはま 鳴浜駅。地下鉄の……』

それはあたしが降りた駅だった。

たしか自販機でコーンスープを買ったときに、販売機横の小さなベンチに荷物を置いたのを覚えている。たぶんそのときに置き忘れたんだろう。

「分かりました、すぐ行きます。本当にありがとうございます！」

電話なのに、なぜか元気よく頭を下げた。

『あ、あの……』

その声に気付かずにはさっさと電話を切ってしまったあたしは、本当にバカだったと今になって思う。

「……どこにいるの？」

何も考えずに自販機の前まで来たあたしだったが、ここに来てようやく自分のバカさ加減に気がついた。

いない。電話の彼らしき人は見あたらなかった。

ここで拾うとは限らないのに。あの電話の時、場所を伝えてもらえばよかった。なのにその前にさっさと受話器を置いたのは、このあたしだ。

「もう一度かけようかな……」

でも財布もカバンも持っていない今のあたしには無理だった。公衆電話を使うにもカードがない。

「あーん、どーしよう」

とりあえず、駅の中を捜し回ってみることにした。

地下鉄 鳴浜駅。そこはもう3年近く通っている駅だったから知り尽くしているのかと思っていたけれど、そうでもないみたいだった。いつも乗る浅海線あさなみの反対側には星城線が通っているのだけれど、ほとんどお世話になることがないので、そっち側は未知の世界だった。

しかしその中にたった一箇所だけ、あたしの記憶を痛烈に蘇らせる場所がある。

星城線の改札口の手前、少しだけ広くなっているこのスペースには、少しばかり哀しい思い出が秘められている。

4年前のちょうどこんな寒い日に、彼は引越していったのだ。

02*あたしと彼と ココロの傷

あれはたしか4年前、ちょうど今日みたいな寒い日だった。

隣の家に住んでいた五十嵐 龍という高校生が、進学のために下宿先へ引っ越していった。

彼はたぶん、あたしの初恋の人。

幼い頃からずっと、あたしを妹のように可愛がってくれる龍のことを『龍ちゃん』と呼んで慕っていた。

彼に対する気持ちは大きくなるばかりで、側にいるだけで幸せだと思えた。

それがある時、それまでに感じたことのないような、訳の分からないもどかしさに襲われたのをきっかけに、恐くて近づけなくなってしまった。まだその時のあたしには、その感覚が何なのか解らなかったから。

そのうち中学生になったあたしは、めっきり彼に会うこともなくなった。それどころか、自分から彼を避けるようにさえなっていた。面と向かったときのあの気まずさというか 哀しい感覚を、あたしはどうしても好きになれなかった。

だから彼が引っ越してしまうことも、前日まで知らなかったのだった。

窓の外のなんとなく慌ただしい様子を不思議に思っ母に訊ねてみると、

「ああ。お隣の龍ちゃん、明日お引っ越しするのよ」と返ってきた。

目の前が真っ白になった。頭がグラグラして、倒れるんじゃないかと思った。避けるようになったことを、遅ればせながら後悔した。

「……どこへ？」 震える声で訊ねると、
「そこまでは分からないけど……、」 母は玄関に置いてあったメモ帳を持ち出してきた。

一番上の紙には、電車の路線らしきものと駅の名前が書かれていた。その上を何度もペンがたどっていて、誰かに道を説明したような跡がある。

「昨日 隣の奥さんにね、春ヶ台への行き方を教えたのよ」

確かにその紙には、ここから一番近い『鳴浜駅』と『春ヶ台駅』の場所が書かれていた。星城線で少し行ったところにその駅はある。

「まったく龍ちゃんつたら、下宿に来られるのを嫌がって場所を覚えてくれないらしくてね」ふふ、と笑って母は続けた。「だから春ヶ台の辺りなんじゃないかしら」

その夜は彼が気になつて眠れなかった。最後の日くらいはどうしても会いに行きたかった。でももしかしたら自分が寝ている間に出發してしまうんじゃないかと、本当は春ヶ台の近くなにかじゃないんじゃないかと、そんなことばかりが気になって、長い長い夜はぼーっと天井を眺めている間に過ぎていった。

彼が家を出ていったのは正午近くだった。彼は電車で身の回りの細かいものを運び、大きな荷物は彼のお父さんが車で運んでいった。高校の友達らしい人たちが、身の回り品を運ぶのを手伝いに來ていた。

彼が家を出て行く様子を、あたしは自分の部屋から眺めていた。行くべきか行かないべきか。この気持ちは、伝えるべきか封印するべきか。

正しい答えなど解らなかった。でも最後に一つだけ、ほんの一言だけ彼に伝えておきたい事があった。

龍ちゃん、ありがとう。

いつもあたしを可愛がってくれた。

「楓、こっちおいで」と、あたしを本当の妹のように抱きしめてくれていた。そんな龍ちゃんは今もういなくなってしまうけれど、あたしは本当に幸せだった。

それでも伝えたかった。……なのに。

彼は行ってしまった。

あのと改札口の目の前で、あたしは思い切って彼を呼んだ。

「龍ちゃんっ！」

楽しそうにしゃべっていた彼やその友達が、いつせいにこちらを振り向く。

「誰だよ、あれ」

「おまえの妹？」

一瞬静まった集団が、また少しざわつく。

大きく息を吸って、「龍ちゃん、あーりがとう、と言おうとしたそのとき、

「さあ？ 知らねえ。人違いじゃねえの」

彼はあたしと目も合わせずに、くるりと後ろを向いて去っていった。

彼らが行ってしまったから、あたしは茫然とその場に立ちつくしていた。

「知らねえ」その言葉はあたしの心を粉々に引き裂いて、そして消えた。

03＊俺と偶然

コツ、コツ、コツ……

ハイヒールの音が軽快に響く。

カッカッカッカッ……

早足で通り過ぎていく人がいる。

人の行き交うこの駅で、いろんなペースの足音を聞く。

静かにベンチに座る僕はコーヒーをすすると、目を閉じてゆっくりゆっくり味わった。

仕事帰りの一杯は、僕のささやかな習慣だ。まあ、一杯といったって自販機のコーヒー。笑えるくらいリーズナブルで、財布のヒモも麻痺してしまうけど。

あまり人影のない休憩室の隅で、今日も早速ボタンを押す。ヴーンというファンの音と同時にガシャンと缶が落とされた。

この駅の、このコーヒー。缶コーヒーにも、少しばかりこだわりがあった。この味は他の商品では味わえない。さらにはこの品を置いた自販機は、ここ鳴浜駅にしか存在しない。

という訳で僕は毎日、この駅でこのコーヒーを飲んで帰るのだ。

この鳴浜駅は、僕が昔住んでいた家に近い。今ではここから8駅離れた春ヶ台駅の近くで一人暮らしをしているが、以前はこの近くで家族と暮らしていた。幼い頃によく利用していたので、思い出もいくつがある。

小学生の頃、家出して電車に乗ったら帰り道が分からなくなって泣きながら家に電話したのはこの駅だった。中学の頃、初めてできた彼女に振られたのもこの駅だ。高校生になって、学校へ行く途中に財布を落としていったこともあった。

……どれも決していい思い出ではないが。まあ、良くも悪くも、思い出は思い出。今となれば全てが笑い話なのである。

だけど……。ただ一つだけ、割り切れない思い出もあった。

高校三年生の冬、僕はこの場所で、大好きな人を傷つけた。本当は、彼女を忘れるためにしたことだった。だけど傷つけてしまったことへのショックはあまりに大きすぎて、その思い出はずっと心に残ってしまった。彼女への想いとショックを、僕は癒すことも切り捨てることもできずに、ただ傷として自分の中に抱えて生きてきたのだった。

そんな僕もいつしか大学を出て社会人になって。そしてここは会社からの帰り道に立ち寄れる駅になった。

いつもの駅の、いつものベンチ。

自販機の横には小さなベンチがある。そこが僕の定位置だった。

と、ここまでは何もかもが普段通りだったのだが、ベンチに腰掛けようとかがんだその時、何か見慣れないモノが目の前をよぎった。

「ん？」

白いボディに控えめな飾りつけのそれは、女性の携帯電話だと思う。まったく、こんな所に落としていくなんて個人情報流出もいいところだ。

僕はそいつを手にとると、コーヒーをぐいっと一気に飲み干して改札横の窓口まで向かった。いくらなんでも放っておくほどの薄情者ではないつもりである。

あいにく、駅員の姿は見えなかった。

「まったく、しょうがねえなあ」

僕は窓口とケータイを交互に見やった。

「……持ち主さん、失礼します」

僕はなぜか電話に一礼したあと、仕方なくそいつを開き、とりあえずプロフィールページを搜してみた。自宅か職場に連絡してやれば安心するだろう。センターキーを押すと、メニューからプロフィールが立ち上がった。するとそこには

「……嘘だろ」

一番に目についた持ち主の名前を見て、僕は凍りついた。一瞬、もと落ちていた場所に戻そうかとすら思った。まさかの展開。

持ち主の彼女は、あの日傷つけた大好きな人だった。

【相原 楓：アイハラ カエデ】

間違いない、あの『楓』だ。小学生の頃、妹のように可愛がっていたあいつなんだ。

僕はケータイから目が離せないまま、少しの間棒立ちになっていた。届けることはできない。逢ってしまったら今度こそ僕は何をしてしまつか分らないから。

今までずっと心に秘めてきた想いだって、今さら彼女に届くはずもない。惨めになるだけだ。

そんな凍てついた僕の手の中のケータイは、まもなく鳴った。

『その電話、あたしのなんです！』

電話口から聞こえるあわてた、でも綺麗に澄んだ声に、人違いであることを祈る。幼い日のあの『楓』が、ここまでの娘になることは僕には考えられない。

『助かります！ 拾っていただいて、ありがとうございました』

「……どういたしまして」

僕が僕だと気づかれないように慎重に話したために、対応が少し無愛想になってしまった。口数を減らし、なるべく口を開かないようにする。

僕はいいつと違って成長期でも何でもないし、声で分かってしまうだろうから。僕だと分かったら、彼女も取りに来にくいに決まっている。

『すぐにうかがいます。本当にありがとうございました！』

電話口の向こうの彼女は嬉しそうに礼を言っと、さっさと電話を切ってしまった。

「あ、あの……」

俺のこと、覚えていてくれますか？ 最後に一言だけ、そう聞かせておきたかったけど。

過去は過去。楓に逢ってはいけない。今の彼女の邪魔をしてはいけない。僕はそう思う。

いや、自分にそう言い聞かせた。

「忘れるんだ」 今日のこと、あの日のことも。

僕は再び歩き出した。

04＊過去の俺と 愛しい人

来ない。楓^{あいつ}が来ない。

あの家からこの駅までなんて、そう遠くはないのに。

間違っても、時計の針が真反対まで動くほどの時間はかからないはずだ。

それなのに。

まったく、世話が焼けるのは昔から変わらない。

手持ちぶさたになつた僕は、なんとなくあの改札口へと向かった。あの日 最後に見た彼女の顔は、見たこともないほど純粹で美しかった。傷つき歪んだその顔は、僕の中から抹消できないほど綺麗で、その綺麗さが余計に僕を苦しめた。

その瞳から涙が溢れる前に、僕は消えなくてはならないと思った。二度と元には戻せない、大切なものを失ったのだと感じた。

あれから僕は、特別な女^{ひと}をつくることができない。

未練なのか、それとも後悔の類なのか、どちらにしろ僕にとって、恋愛は恐ろしいものと化した。

僕でさえこの有様なのだから、彼女にはこれ以上のトラウマをつくってしまったに違いない。あるいは、幼すぎて覚えていないだろうか。

もう一度、あの頃に戻ってやり直したい。そうしたら、今度こそきちんと伝えてやるのに……。

自動改札機の手前に立つと、あの日の記憶が驚くほど鮮明に蘇った。

そう、ちょうどこの辺りで、愛しい人の声を聞いた。ほとんど顔を合わせなくなっていたから、呼ばれただけでも胸が締め付けられる

ほどに愛しかった。

でも、これからは「本当に」会えなくなるということを考えると、彼女のことは忘れるしかないと思うのだった。いつまでも引きずっているわけにはいかない。僕の中から消してしまうしかない、そう思ったのだった。

『龍ちゃんっ！』

あの日、彼女にそう呼ばれて おもむろに振り返った僕。でも今はもう振り返れない。脳裏に焼き付いたままの悲痛な顔が、また蘇ってしまいそうだから。

「龍ちゃん……？」

そう、たとえ誰かに呼ばれようとも。

振り返つてはいけない。でも、もう一度あの場面からやり直したい。もう一度振り返って……！

ケータイを握りしめたまま、おそろおそろ振り返ったその先には、
「龍ちゃんなの……っ？」

彼女がいた。あの日とは全く正反対の、今度は驚いた顔をして。

僕も僕で立派に驚いた。まさか本当に、そこに現れるとは思わなかったから。

一瞬、幻覚かと思つて目をそらした。だけど彼女から注がれてくる熱い視線に、僕の目は再び吸い寄せられるように彼女を捉えた。

「楓……っ、本当に楓なのか？」

瞳に張った透明な幕を隠すように、彼女は困ったように笑ってゆっくりとうなずいた。笑った顔なんて、もう二度と見ることはできないと思つていたのに。

「遅くなってごめんなさい。居場所が分からなくて、ずいぶん探しちゃった」

舌を出して笑う彼女は、やっぱり僕の好きな楓だ。

「ごめん。会う場所 決めればよかったな」

久しぶりに見る彼女が眩しくて、真っ直ぐ見てやることができない。

「いいの。言ってくれる前に切ったあたしが悪いんだから」

「え？」

「ほら あのととき、言ってくれようとしたんでしょ？」 『あ、あの

……』 って 「

「いや、あれはその……」

とにかく 、君に会えてよかった。

05＊過去のあたしと 大好きな人

駅の中を、あたしはほとんど彷徨うように歩いていた。

出口付近で待っているかと思っただけで、どの出口にも彼らしき人は見当たらなかった。

自販機の前にも誰もいない。浅海線の改札口にもいない。そんなと残るは

「行きたくないよ」

心の中だけでは足りなかったようで、つい口に出してしまった。

それでもやっぱりあたしは、人を待たせるのは好きじゃないみたい。

自分の意志とは裏腹に、足は星城線の方へと進んでいた。

少し歩くと、懐かしい光景が広がった。

あれから一度も訪れなかった場所。だけど4年前と何も変わっていない。

と、そのとき、ふと人影を見た。黒のスーツ姿には明らかに似合わない、真っ白なケータイを持って、彼は立っている。

あたしには背中が向けられていて、顔は見えないけれど、ただ一点だけを見つめているようじつとしている。

「あの、それ……」

話しかけようとしたけれど、突然感じた不思議な何かに、あたしの身体は固まった。

切ないような、温かいような、苦しいような、嬉しいような……。何だか懐かしいこの感じ。

温かくて大きな背中。そう、よくあたしをおんぶしてくれた。

それは

「龍ちゃん……？」

ゆっくりゆっくり、その人は振り返った。

「龍ちゃんなの……っ？」

彼の顔を確認する前に 視界が滲んできてしまつて、人違いだった
らと一瞬焦つた。

だけど、

「楓……っ、本当に楓なのか？」

その声は大好きな龍ちゃんに違いなかった。

ケータイを拾ってもらつただけで泣いてしまうような変なヤツだ
と思われたくないから、頑張つて涙を隠そうとする。

それでも上手くいなくて、しょうがないから舌を出して笑つてみ
せた。

「遅くなつてごめんなさい。居場所が分からなくて、ずいぶん探し
ちゃつた」

「ごめん。会う場所 決めればよかつたな」

何よりもあたしを最優先に考えてくれる龍ちゃんが好き。
変わつてないみたいで、そんなことだけでも嬉しい。

ただ会えただけ。それだけなのに……。

こんな些細なことだけで泣いちゃうあたしは、もしかしたら本当に
変なヤツなのかもしれない。

「いいの。言つてくれる前に切つたあたしが悪いんだから」

受話器を置く前に一瞬だけ、『あ、あの……』つて聞こえた気がし
たけど、気付いたときにはもう切れてしまつていた。

だから悪いのは龍ちゃんじゃないんだよ。

「ほら あのと看、言つてくれようとしたんでしょ？ 『あ、あの

……』つて」

「いや、あれはその……」

もちろん、彼があのと看本当は何を言おうとしたかをちゃんと
知ることができたのは、もう少し先のこと。

06*俺と俺らしくない俺

「……くしゅん」

彼女が小さなくしゃみをしたところで、僕は重大なことに気がついた。

「お前！ 寒いだろ、その格好」

このくそ寒い空の下を、楓はこんな薄着で走ってきたのか。

「う、うん……。まあね」

えへへ、と笑ってみせる彼女の無邪気さが、愛しさとなって僕の胸を締めつける。

「まあね、じゃねえよ。風邪ひくぞ」

僕はジャケットを脱いで彼女にかぶせてやった。

「あつ、ダメだよ。龍ちゃんが寒く……」

すっぱりと収まってしまふ彼女に、愛しさが増す。

「俺はいいから」 そういうと僕は、「暖かいところ、行こっか」

彼女の手を引き、繁華街へ続く出口の方へと向かった。

こうして手を繋ぐのは、何年ぶりだろうか。

今の僕にとっては、『楓と手を繋ぐ』のは結構重大なことだが、彼女からしてみれば やはり僕はいつもの『幼なじみの龍ちゃん』なんだろう。

あの日、彼女は最後に何を言いに来たのかは分からないが、あの頃もう既に彼女が僕を避けるようになっていたのは事実である。

僕のような気持ちは 楓にもあるなんてことは、まずありえない。

その証拠に、彼女の方もこうして平気で手を繋いでいられるのだ。僕が今、あの頃と同じ……いや、少しは大人になったはずの気持

ちで、楓の手を握っていると知ったら、彼女はどつするだろうか。僕の手を振り払って逃げるだろうか。それとも……

「ごめん……っ」

突然、楓が手を離れた。

僕の気持ちを見破ったのだと、瞬時に悟った。

「ああ。分かってるよ」

覚悟はできているはずだ。元はといえば、こいつの事は忘れるつもりだったわけだし。でもこれじゃ……。

ところが意外なことに、彼女がほいた指先は、何やら腹の辺りで作業をしたあと、再び僕の手のひらに戻ってきた。あまりに予想外で、状況を読むまでに時間がかかってしまう。そんな、手から力の抜けたままの僕を安心させてくれるかのように、彼女は笑って言った。

「寒かったから……前、閉めたの」

「あ　そ、そうだよな！　寒いもんな」

一人で勝手に振り回された自分に失笑しつつ、再び歩き出す。

目の前に迫った外への階段を登っていくと、上からの風が直接吹き抜けて、確かに寒い。

「で、何が？」　並んで歩く彼女が言った。

「は？」

あまりに唐突すぎて、何がなんだか分かったもんじやない。驚いたのと思いのほか強い口調で聞き返してしまった気がして、少し慌てる。「さっき言ったじゃない？」　『分かってる』って。あれ、何のことかないーと思つて」

彼女はそんなことは全く気にしていないようだった。というかそれより俺、ヤバいところを突かれている。

「あ、いや別に。　あっ　ほら、後でゆっくり話すからさ」　そ

う誤魔化して、とりあえず先を急ぐフリを試してみた。
「とにかく行こうぜ」

斜め後ろを歩く彼女は、僕の手を柔らかく握ったまま何も言わない。寒いからなのかもしれないが、4年のブランクのせいで妙な空気が流れているようで齒がゆい。

この位置からでは楓を見ることはできないが、こうしているだけでも彼女の変化は自然と伝わってくる。

僕の覚えている限りでは、こいつの手はこんなに大きくはなかった。もっと小さくて丸っこくて、いかにも子供という感じの手だった。もつとも手なんか繋ぐことができたのは、楓が小学生の頃までだったけど。

彼女の成長が切なく感じられる。僕を置いて、楓はどんどん大人になっていく。あの日の思い出の中に僕を閉じこめたまま、楓はどこか遠くへ行ってしまっただろう。

過去にこだわるのは嫌いだが、彼女に関してはそうとは言い切れない。彼女との思い出は綺麗すぎて、最後のあの瞬間だけが逆に際立ってしまう。彼女だけは、どうしても記憶から消せない。皮肉なことに、忘れようと思う度に思い出してしまっているのは事実なのだ。

俺は男としてどうするべきか。

彼女の幸せを優先して、この気持ちは隠し通そうか。それとも、いつそプライドなんか放り捨てて全てをぶつけてしまおうか。

どうしてこんな事をいつまでも考えてしまっただろう。

駆け引きなんて、女々しいことはしたくない。思ったことはその場でストレートに伝えたい。これまでだって、ずっとそうしてきた……、はずなのに。こいつのことが絡むと突然、自分が正反対の内気

な男になるのだ。

楓といると、まるで調子が狂う。こんなふうに悩むなんて、俺らしさの欠片もない。

もどかしかったら伝えればいい。……そう。分かっているけど。

言葉にしたら、きっと何かが壊れる。僕たちの関係も、思い出も、もちろんこの空気も、何もかも。

伝えられないから、余計にもどかしい。

息が詰まりそうに苦しいのは、気まずい空気が流れるからなんじゃない。

07*あたしと 幸せの音

いつもあたしを最優先に考えてくれて、妹みたいに可愛がってくれる。

それでも少し強引で、乱暴な言葉遣いが他人に誤解を与えたりする。でもそんなギャップがあたしのツボだったり。

今もまたほら、勝手にあたしの手を引いて、出口の方へ歩いてる。

でもこれも彼の優しさ。薄着のあたしを見て、「風邪ひくぞ」って暖かい場所を探してくれて。それに何となく、歩幅も合わせてくれてるみたい。

あたしには龍ちゃんが側にいてくれるだけで、十分暖かくて幸せなのに。

そんな彼を、あの頃どうして避けるようになったんだろ。

……もったいないことしたなあ、なんて思ったり。

心臓が、音を立てて鳴ってしまう。

斜め前を歩く彼は、そんなあたしの手を優しく引くだけで、何も言わない。まるであたしの心臓の音を聞いているみたいに。

絶対に聞かれたくないのに。こんなこと、絶対に気づかれたくないのに。

そう思えば思うほどに、あたしの心臓は 今にも飛び出しそうなほどに激しく鳴ってしまふ。

そんな自分を落착かせるために、冷静に物事を考えてみた。

龍ちゃんと手を繋いで歩くなんて、何年ぶりかな。

まさかこんな風に、また手を繋げる日が来るなんて、思ってもいなかった。

嬉しいような、恥ずかしいような。

彼はどんな気持ちで繋いでくれているのかな。……まさかね、あたしじゃないんだから。

無理なことを考えるのって、すごく悲しい。

彼はそんなものにこだわったりしない。

今の彼の『手を繋ぐ』と、あたしの『手を繋ぐ』は、きっと天と地ほどに違つて。

風の吹き抜ける階段に近づくにつれて寒くなってきた、前ボタンを閉めたくなってくる。

彼の貸してくれたジャケット。大好きな彼の香りがする。

せっかく繋いでるのにもったいないけど、片手じゃボタンは閉められないから手を離すしかないみたい。

でも一度離しちゃったら、どうしたらいいんだろ。もう一度繋いでなんて、あたしには言えないよ……。

「ごめん……っ」

ああ、離しちゃった。
すると、

「ああ。分かつてるよ」

彼は寒がるあたしに気付いてくれていたようで、スツと手をほどいてくれた。

やっぱり龍ちゃんは優しい。

だけど。

今のはそんな単純な言葉じゃなかったみたい。

彼の顔が妙に寂しそうに見えたのは、気のせいなんかじゃないと思うから。

ボタンを閉めるとあたしの指は、自分でもびっくりするほど素直に、彼の手のひらに戻っていった。

ちよつと大胆なことをやってのけた自分と、少しもあたしを拒まない彼に動揺しながら、ごまかすように言う。

「寒かったから……前、閉めたの」

「あ　　そ、そうだよな！　寒いもんな」

悪戯に笑う彼の姿があたしの心を鷲掴みにする。

あたしが……彼の寂しさを、分かってあげたい。

「『分かつてる』って。あれ、何のことかなーと思つて」

だって、放つておけない顔してた。

オレンジ色が柔らかく零れる窓の前で、彼の足は止まった。

「ここでいいか？」

こんな風にあたしに聞いてくれるなんて、珍しいかもしれない。

「うん。ありがと」　でも本当は、龍ちゃんが決めてくれたところなら　どこだって嬉しい。

ガラス越しに可愛らしいティーカップが見える。あたしの大好きな物たちを　いっぱい集めたような雰囲気のは、カフェだった。
「お前、こういうの好きだろ」　彼が窓辺を指さして言う。彼も同じティーカップを指していた。

「うん、大好き！」　そう言つと、彼は懐かしそうに笑つた。

「やっぱりな。変わつてない」

チリン　チリン

彼が扉を押し開けると、明るい鈴の音が響いた。暖かい空気とともに店内を流れるオルゴールの澄んだ音色が、すっかり冷たくなつてしまったあたしたちを優しく包んでくれる。

「いらつしやいませ。お二人様ですね」

カントリー調のエプロンをした店員さんが、笑顔で迎えてくれた。

「こちらへどうぞ」

空いている時間帯のようで、店内には若いカップルと小さな子供を連れた親子の姿が見受けられるだけだった。

案内されたのは窓際の席。ガラスに向かう形の席で、他のカフェ

ではあまり見ない不思議な配置に 嬉しさが増した。

龍ちゃんの隣に、あたしが座る。

繁いでいた手と手が自然にほどける。飛び跳ねていた心臓が、少し落ち着くのが分かった。

あたしの中で鳴る音を、オルゴールのBGMがかき消してくれている気がする。

いつもよりちょっとスピードを上げて、それでも定期的に鳴っている。

幸せは……、鳴るんだね。

08＊あたしの願いが叶うとき

華奢な木彫りの椅子にかけると、龍ちゃんがのぞき込むようにしてあたしを見た。

「なに……？」

「んー」 何ともとれないような返事をして、彼は続けた。「変わったような、変わってないような……だな」

「よく分かんないよ」 あたしは笑って返す。

「俺も分かんねえ」 彼も笑っていた。

頼んだコーヒートミルクティが来るまで、あたしたちはいろんな事を話した。

小さい頃を思い出したり、学校の話をしたり。龍ちゃんは、大学や会社のことをたくさん話してくれる。目を細めて楽しそうに話す時の彼は、昔と変わらない無邪気な『龍ちゃん』だった。

変わったような、変わってないような。

なんとなく分かるような気もする。

だって実際、久しぶりに見た龍ちゃんは以前とだいぶ変わってた。髪は明るいブラウンから落ち着いた色に染め直されて、いつも大きなピアスが存在を主張していた耳には、ずいぶん華奢なクロスだけが光っている。たまに見かけた制服姿も今では端正なスーツ姿に変わって、彼はいつのまにか一緒にいるのが恥ずかしいくらいに魅力的な『大人の男』になってしまった。

彼の隣にあたしがいるなんて、まるで間違ってるんじゃないかな。少なくとも、こんなにお子ちゃまで平凡なあたしと、誰もが振り返るような彼とじゃ、あまりにも不釣り合いだろうし。

そしてそんな『振り返る女』の中に、彼にふさわしい大人の女性は存在するのだ。

なんだか自分に自信が持てなくなってしまう。

いったい今までに何人の女性ひとが、そんなふうに龍ちゃんを独り占

めしてきたんだろう。こんなあたしじゃ、お話にもならない、ね。

「下宿も自由で楽しかったんだぜ。大家のオバチャンはうるさかったけどな」

彼が悪戯っぽく笑う。

「寂しくなかったの？」

できるだけ冷静を装っていた。とろけそうな心を見透かされるわけにいかない。

「当たり前だろ」

あたしのおでこをピンツとはじいて、こっちをにらみつけている。

「あーっ、口が笑ってる！ ウソつきッ！」

「バカ」

他愛もない会話だけど、あたしにはそれだけで十分だった。

「なーんだ。龍ちゃんが引越すとき、あたしはすごく寂しかったのにさっ」

何気なくそう言ってしまって、はっと口をつぐんだ。

お互い『あの日のこと』には触れないように気を遣って話していたのに。

彼との間に、妙な空気が流れ出す。行き場を失ってしまった気持ちだが、あたしの眼球だけをどうしようもなく泳がせていた。

「お待たせいたしました」

なんとも素晴らしいタイミングでドリンクがやって来る。

「中身 熱いですので、お気を付けください」

柔らかく優しい声で、店員さんは言った。

「ありがとうございます」

あたしがそう言うと、微笑み返してくれた。

ぼうつと窓の外を眺めていたら、口が半開きになっているのに気づいて慌てて閉じた。

今の、見られちゃったかな……。

さりげなく隣を確認すると、なんだか真剣な目で遠くを見つめる彼がいた。

「……………」

黙ったまま、何も言わない。

余計に落ち着かない気持ちがあくすぐりたい。目のやり場に困っていたら、ガラスに映った彼と視線がぶつかってドキツとした。

なに考えてるの？

なんて聞くほど、おせっかいで空気の読めない女じゃない。

あたしも静かに外でも見てみようかな……………」

ふと、リラックスモードに突入しようとしていたあたしの耳に、龍ちゃんの声が響いた。

「俺さ……………」

遠くの方を見つめたまま、まるで今思いついたことのように淡々と言う。

「俺さ、お前のこと好きだわ」

ドクンツと心臓が跳ねる。ガラスの中の彼を、上目づかいにおそろおそろ見やった。

「うそお……………でしょ……………」

でも。

少なくとも、窓ガラスに注がれる彼の真剣な目を見る限り、それは嘘なんかじゃないのだった。

「ねえ、本気で……………言ってる？」

冗談だよ、なんて、笑わないよね。

「今日お前に会って、確信した。死ぬほど本気だって」

「……………！」

何か言わなきゃ。早く伝えなきゃ。

気持ちだけが焦って、言葉にならない。「夢じゃ……………、ないよね」

「え？」

あたしってば、なに弱気になってるの。

龍ちゃんのこんなに真剣な顔見たの、初めてなのに。こんなに真剣

に伝えてくれたのに。

「あたしも……」

言わなきゃ。

「あたしもずっと……」

伝えなきゃ。

だけど。

「やめろ」

静かに、でも低く凄みを利かせ、遮るように彼は言った。

「本当の事を言え」

握りしめられた彼の手が、テーブルの陰で震えてる。

「ほんとだよ」

ただの優しさなんかじゃない。これは本心だよ。

あたしは、心からあなたに惹かれてた。

「龍ちゃんこそ。もし嘘だったら、あたし……泣いちゃうからね……」

「」

そう言いつつも、もうすでにあたしの視界は霞み始めてるみたいだった。

「バ……ッ、バカ！ 泣くなよ」

ちよつと驚いて、でもなんだか幸せそう、彼があたしの頭をくしゅくしゅつと撫でる。

ねえ、あたしも幸せそうに見える？

幸せは、鳴る。ほら今だって、あたしの胸は今にもはちきれそうなくらい音を立ててる。

ねえ、龍ちゃんの幸せも、鳴ってる？

09＊俺の願いが叶うとき

答えを期待した訳じゃない。

それに、伝えたいというよりは、ただ自分自身にけじめをつけたいというだけの事だった。

いつも思い出だけを見てきた。僕の中でこいつだけが、『女』と呼べる存在だった。

でも今日やっと分かったのだ。

楓は変わった。僕の思い出の中の彼女とは比べ物にならないほどに。声も仕草も愛らしい瞳も、なにかもが美しく成長していた。そんな彼女を邪魔する権利など僕にはない。ここは男らしく引き下がるのが筋だ。

だけど最後に一度だけ、彼女に伝えておきたくて、どうしようもない自己満足に、彼女を巻き込んでしまったという訳だ。

緊張してるカッコ悪い僕を悟られないために、できるだけ淡々と述べた。

正直、与える印象なんて、もうどうでも良かった。何も突っ込まずに、聞き流してほしい気分だった。

「へえ、そうなの」って、負けなくらい淡々と答えてくれても良かったのに。

「本当の事を言え」

「ほんとだよ」

優しい彼女は、きっと誰にでも気を遣うんだろう。

「龍ちゃんこそ。もし嘘だったら、あたし…泣いちゃうからね…」

！

うつすら膜の張った瞳を誤魔化しながら、頬を真紅に染めて僕を見上げる彼女は、僕だけが知っている楓だ。

「ったく、かわいい奴」

そう笑って頭をくしゃくしゃにすると、幸せそうに楓も笑った。
「最高だ」

彼女の前髪をかき上げ、額にそっと口づけた。絹のように柔らかな肌の感触が伝わる。

大きく見開いた瞳だけで僕を見上げる彼女を、壊してしまいたい衝動に駆られる。

でも、今はまだダメだ。

もう一度だけ彼女の柔らかい肌を唇で確認すると、僕たちはまた窓の外の世界に目を向けた。

「もうすぐクリスマスだね」

幻想的に街頭や街路樹を彩るイルミネーションに、楓が目を細める。

「今年こそ、雪が降ったらいいなあ」

彼女はホワイトクリスマスを想像しているかのように、柔らかい瞳でぼんやりと外を見やっていた。

「外、行くか？」

僕は飲み終わったコーヒーのグラスを、確認するように少し傾けながら訊いた。

「じゃあ、もう少し待って。今、飲み終わるから」

彼女は嬉しそうに僕に笑いかけると、少し慌てながら残りのミルクティーを飲み干した。

「おいしかったあ」

満足そうにそう言って立ち上がりうとする彼女の口元に、ミルクティーが少し残っている。

「ちょっと待って」

僕は彼女の腕をできるだけ優しく引つ張って抱き寄せた。僕が顔を近づけると、彼女はとっさに目をつぶった。

「ここ……付いてるぞ」

指で拭ってやるつもりだったが、本能は理性を無視し、気付くと唇が彼女の頬に触れていた。

惜しいところまで行っただので、彼女もさすがに瞳をぱちくりと忙し

く動かしている。

まだダメだ。あともう少し待っている。俺はせめてクリスマスまで……取っておきたいんだ。

結構大胆な行動も、実は得意なのかもしれない。

外の凍えるような寒さは、いつこうに和らぐ気配がなかった。

こんな気温では、寄り添っていないければ死んでしまいそうだ。夜の街に散りばめられたイルミネーションを二人で眺めながら、大きな噴水の縁に腰かけた。

「星は……見えないね」

残念そうに楓が呟く。都会の真ん中の公園には、星の光は届いてくれていなかった。

「いつか、満点の星空が見てみたいな」

「そうだな……」

楓と二人で満天の星空を眺められたら、どんなに幸せなんだろう。二人で夜の草原に寝転んで、一晩中 眠りもせずに。

「行こう、草原に」

突然 彼女の手を握り、草原なんて言い出した僕はおかしな奴だっただろう。

くすくす笑いながら、彼女は訊いてきた。「星を見に行くの？」

「ああ。俺の金が貯まったら、二人で見に行くんだ」

彼女は嬉しそうに微笑んだ。本気にしてくれたかどうかは分からない。でも必ず彼女を連れて行くんだ。

「そんなにお金がないの？」

「……」

彼女が微笑したのは、喜んだからではなかったのかもしれない。

「約束だよ」

運転席の窓を開けると、楓が小指をさし出してきた。

「ほら、ゆびきり」

少し面倒くさそうに自分の小指を絡めると、彼女の小指は微かに温かった。

冷え切った楓を、僕は家まで送り届けてやった。公園から僕の家までは近かったから、そこから車を出して彼女を家に送った。

懐かしい街だ。引越してから、まだ4年しか経っていないのに。そのせいか、街は以前と全く変わっていないかった。相変わらず、楓の家の窓からは暖かな光が零れていて。相変わらず、楓の家の隣には僕の家があつて。

楓が見えなくなってしまうってから、僕はひさしぶりに実家に寄つていこうと思いついた。

父さんと母さんの顔をしばらく見ていない。これから年末年始で忙しくなる時期だし、なかなか顔を出せなくなるだろう。と言ってもまあ、正月には帰ってくるのか……。

そんなことをごちゃごちゃ考えながら、とにかく僕は車を止め、久しぶりに実家の門をくぐった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801e/>

めいぷる しろっぷ

2010年12月16日02時04分発行